【国土交通省】

平成20年度　地方の元気再生事業　事業実施調書

(1) 取組名	日本一の蔵再生によるまちおこし		
(2) 実施団体名	喜多方蔵のまちづくり協議会	(3) 対象地域	喜多方市全域
(4) 代表団体名	特定非営利活動法人まちづくり喜多方　代表理事　江花　圭司	(5) 推薦団体名	

(6)実施した取組の内容

取組①　蔵の写真展とシンポジウム

実施主体：喜多方蔵の会・喜多方観光協会

実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
	取組の目的：合併前旧市町村に存在する蔵写真100点による巡回写真展とシンポジウムを開催し、蔵が地域の資源、文化、風土であることを再認識し、蔵を通し、まちづくりの高揚を図る。 また、写真展での写真を活用した絵はがきを作成し、喜多方らしさをPRする。	取組の結果：各旧町村毎に蔵写真パネル20点を制作し、旧喜多方市の蔵を加えた100点による展示会を、各地区で実施したことにより、「蔵は旧喜多方市だけの資源」という意識から、市民の財産であると言う蔵に対する認識が、来場者の意見（来場者ノート）から伺われ、地域づくりに取り組む一体感の気運を醸成することができた。更に、シンポジウム（参加者60名）を開催したことで、今まで蔵の存在について意識が薄かった方々も、他地域でもシンポジウムを行いたいという意見をいただいた。 また、絵はがきは現在作成中で蔵の町喜多方の広報等に幅広く活用する。

取組②　蔵の登録有形文化財促進

実施主体：喜多方蔵の会

実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
	取組の目的：歴史的町並（景観）や地域の「蔵文化」を守り、保存・活用を図るため、蔵の所有者に対する登録有形文化財の啓蒙普及のための講習会を開催し、30棟の登録促進を図る。	取組の結果：11月2日、工学院大学教授、後藤教授による登録有形文化財制度の講演会（参加者25名）を開催したほか、登録後の活用対策などについて、2回の研修会を開催し、登録促進を図ったことにより、51棟が登録されることとなった。今後は更に登録した蔵を公開するなど、観光に結びつけた検討が必要である。

取組③　蔵ガク（学）蔵ベン（勉）

実施主体：喜多方蔵の会

実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
	取組の目的：蔵をつくる思想・ロマンについての講演会、「蔵のまち喜多方のルーツを探る」と題した蔵文化の教材を作成し、蔵所有者や旅館の女将さんはじめ、市民を対象に学習会などを開催し、市民や観光客にPRできる体制を確立する。 また、喜多方（北方）地方には先人達が学んだ藤樹学について、「藤樹心学」清座（講座）として一般市民向けに開き、地域の人づくりを行う。	取組の結果：10月26日、蔵をつくる思想・ロマンなどについて、NHKエンタープライズ世界遺産事務局長である須磨章氏の講演会（参加者60名）を開催、蔵のストーリー・修復と保存・蔵の利活用の3つの提言を受け、問題を浮き彫りにしてくれた。その後、須磨章氏の協力を得て、教材を作成し、市民向けに学習会を開催した。特に「蔵を保存していきたいが多額の費用がかかることから保存は困難」との意見が多く出され、その対策が課題として残された。 また、「藤樹心学」清座を3回開催（各40名参加）、この心学によって、喜多方の蔵が生れ、町を発展させ原動力となってきたことが確認できた。

取組④　蔵の実態把握調査

実施主体：喜多方蔵の会

実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
	取組の目的：喜多方市の4,200棟の蔵について、地域から調査員を募集し、3,000棟の蔵の位置・用途・様式など実態把握調査を実施する。	取組の結果：調査地区の蔵の数について3000棟と見込んでいたが調査の結果2305棟であることが判明した。調査は市民調査員45名（公募）と指導員9名により2305棟の蔵調査を実施。調査項目は地図上での所在地（プロット）、外観の写真、構造上の特徴、用途、建築年代、傷みの状態など多岐にわたり記録し、入力した。今後はデーターベースの構築により情報発信の出来る体制づくりが必要となっている。

取組⑤　保存と再生のための「蔵手本」の作成と後継者育成

実施主体：県建築士会喜多方支部・喜多方蔵の会

実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
	取組の目的：喜多方の蔵の保存と再生を図るため、耐震やメンテナンス手法等も含め、特徴と伝統を活かした蔵保存と再生のための活用指針「蔵手本」を作成する。 また、蔵の建築や補修に欠かせない伝統的な工法や技能の継承を確実にするため、若手の左官や学生を対象とした講習会並びにワークショップを実施する。	取組の結果：喜多方の蔵100棟について、建築士の専門的な視点で用途や特徴など分類・分析を行うとともに、維持、管理、再生、活用の手法を紹介することで、蔵の継承に役立つ活きた資料（500部作成）が整備された。 また、後継者育成では、喜多方の蔵職人集団・若鷲（わし）会を講師に迎え、11月11日に会津工業高校生6名（＋教師1名）、11月12日に喜多方工業高校生6名（＋教師1名）、11月16日に一般市民10名が参加して、左官ワークショップ（講習会）を実施した。しかし若手左官による講習会は該当者がなく実施できなかった、後継者育成が課題として残された。

取組⑥　蔵のコンサルティング機能を持ったシンクタンクの創設

実施主体：喜多方蔵の会

実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
	取組の目的：蔵の保全、補修や利活用に関し、各方面の専門家が戦略立案やアドバイス等を行う組織を立ち上げ、プロジェクトの司令塔として機能させる。	取組の結果：東京大学都市デザイン研究室の北沢猛教授を座長に迎え、10月16日に第1回目の会合を実施。1月29日には、「研究所」の組織体制など、今後の運営方法や取り組む課題を整理、立ち上げする枠組みが固まってきたが、今後は、いかに組織間の連携を図り運営し実践して行くかが課題となっている。

取組⑦　蔵を活用した社会実験

実施主体：NPO法人まちづくり喜多方・喜多方観光協会

実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
	取組の目的：市内に多数存在する蔵（空き蔵を含む）の活用促進を図るため、各種の社会実験を行う。（・蔵での結婚披露宴　・パティシェによる喜多方の食材を使ったスイーツレストラン　・未公開蔵の公開と生活体験　・安全安心地産地消喜多方ブランドとなる農産物の販売及びその食材による調理の提供　・子育て支援や障害福祉などのファミリーサポート（蔵テラス）　・高齢者や主婦等の民間ボランティアによる蔵活用（店舗）の成功事例づくり　・昭和と今を蔵べっぺ展）	取組の結果：各社会実験を通し、蔵の特性や利点を活かした様々な利活用の可能性を示すことができた。特に、結婚式やパティシェによるスイーツレストランでのアンケート、未公開蔵の公開と生活体験による地元との懇談会などから、蔵は地産地消をキーワードとする地域の特産食材や食文化、発酵や醸造などの地場産業も絡めた「食」との相性が良いことが分かった。その一方で、蔵特有の構造に起因する利活用上のいくつかの問題点（水まわり、温度調節、採光性など）が浮き彫りになった。また、単発的な活動をいかに滞在時間の延長につなげるか課題として残った。 （参加者及び入場者：結婚式60名・パティシェによるスイーツレストラン40名　・未公開蔵の公開と生活体験466名　・農産物販売932名　・ファミリーサポート（蔵テラス）1600名　・蔵活用（店舗）の成功事例づくり1500名　・昭和と今を蔵べっぺ展5，900名）

(6)実施した取組の内容	取組⑧	蔵を活用したグリーン・ツーリズムの推進	
	実施主体	喜多方観光協会	
	実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
		取組の目的：農村部における蔵を活用したグリーン・ツーリズムを行おうとする団体等を核として、体験メニューの開発、蔵の保存と利活用の検討及び蔵による賑わいを創出し、蔵の保存利活用の促進とグリーン・ツーリズムの推進を図る。	取組の結果：現在のグリーン・ツーリズムは、主に冬以外の時期に農作業を主に取組まれているが、冬でも実施できる事が実証された。地域の生活と密着した蔵で昔から伝わる農作業や漬物体験、また喜多方らしいレンガ蔵が残る岩月町・三津谷のライトアップにより冬の蔵を活用した賑わいの創出、さらに喜多方のまち中の初市に合わせてまち中の蔵を活用したグリーン・ツーリズム（雄国竹細工体験）を実施する事により農村部の伝統産業とまち中のイベントの連携が図られた。また、取組みの中で海外からの問い合わせもあり、新たな需用への課題が残された。
	取組⑨	蔵を活用した観光新ルートの開発	
	実施主体	喜多方観光協会	
	実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
		取組の目的：明治23年に作られた産業遺産「三津谷煉瓦窯」を核にした新観光ルート、また、並行し蔵と新市の新たな観光素材等を組み合わせた観光ルートも策定し、これらを軸とした観光商品を創出する。 また、蔵のまち・喜多方の顔とも言える「おたづき蔵通り」において、通過交通の速度を抑制し、観光客や地域のお年寄り子供が安心して歩ける道路のあり方を探る目的で、社会実験を実施する。	取組の結果：市民を対象としたモニターツアー2回（参加者41名）、旅行エージェント専門家によるモニターツアー2回（依頼者21名）実施した。旅行エージェント等専門家から、内陸地で喜多方市のように煉瓦蔵が点在する箇所はあまり例を見ないと意見が出された。この特色を生かし、煉瓦師の人生をストーリー化した2時間の煉瓦蔵周遊コースが組めることが分かったが、滞在時間を延ばす宿泊滞在型ルートの検証も必要であるとの意見が出された。また、「おたづき蔵通り」では11月1日より30日までの1ヶ月間、通過交通の速度を抑制する社会実験を実施し、安全確保が図られることが実証された。また期間中は来訪した観光客や地域住民、交通運輸関係者301名にアンケートを実施、その結果、歩行者の安全確保や景観向上のための取組を要望する声が多いことが明らかになった。
	取組⑩	観光コンシェルジュ（観光案内役）養成と認定	
	実施主体	喜多方観光協会	
	実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
		取組の目的：喜多方を訪れる年間170万人近い観光客に対して、より上質なおもてなしを提供するため、観光案内人（観光コンシェルジュ）を養成するとともに、観光コンジェルジュ認定制度を導入し、オンリーワンのおもてなしのまちづくりを目指す	取組の結果：観光コンシェルジュ養成講座を（財）日本交通公社嘱託講師、渡壁先生の講演と講習等を含め3回実施（60名が受講）し、2月4日には認定試験を実施した。観光コンシェルジュの認定により着地型観光を推進する上での人的体制が整った。今後は本制度の周知徹底と活躍の場の確保が必要となっている。
	取組⑪	発酵醸造など歴史的産業と融合した新たな事業発掘	
	実施主体	会津喜多方商工会議所	
	実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
		取組の目的：発酵産業（酒造、味噌、醤油等）の鍵となる有用な微生物（酵母、こうじ菌など）を探索するため、微生物探索・保存・利用を図るためのあり方についての勉強会実施、微生物利用や機能の特定をするための方法などについてのセミナー、シンポジウムを開催する。その後、飯豊山において探索し、伝統産業である発酵産業の発展と、空き蔵となっている醸造蔵などの利活用を図ることで、蔵のまち喜多方の再生へとつなげていく。	取組の結果：12月9日、2月3日に福島県ハイテクプラザ桑田所長、福大杉森先生を講師に、発酵、醸造の取組みや研究事例の勉強会（参加者100名）を実施。更に2月25日には東京農業大学小泉武夫教授によるセミナー（参加者300名）を開催した。これらを通じ、知識が習得されるとともに、現状の把握や今後の方向性について意見交換が行われるとともに、アンケート調査結果から広く市民に理解が深まったことが伺われ、また、発酵・微生物による新たな事業展開に興味を持つ関係事業者の見識が深まった。更に、秋田県総合食品研究所を先進地視察し、参加者のレポートから、新しい事業の可能性について知識が深められた。今後は飯豊山から直接、微生物を採取し、分析など実践が期待されている。
	取組⑫	蔵のまちにふさわしい食の観光素材の発掘	
	実施主体	喜多方のれん会	
	実施内容、実施結果	当初提案により予定していた計画	実際の取組内容及びその結果
		取組の目的：「蔵のまち」で培われた郷土の食文化提案、試食会を開催し「蔵のまち」観光にふさわしい食の観光素材を発掘・PRし、さらにオリジナル商品を開発する。	取組の結果：・11月29日大和川酒造　北方風土館で、こづゆ、粕煮などの伝統食や創作料理などの新しい食の発表、試食会(出席者200名)を開催。アンケート調査も実施し133名から回答があった。その結果、合併した新喜多方市の周辺から調達した食材の豊かさや美味しさが再確認でき、新たな食の提案の可能性が開けた。また、アンケートの集計結果からも地域で取れる食材を使った商品を望む声が多く、食の観光素材の発掘に繋がったことから、売れる製品化に向けた取組みが必要となっている。
(7)実施体制	平成20年度の取組実施における体制・役割分担		取組の実施を踏まえた反省点
	◆喜多方蔵のまちづくり協議会・・19団体で構成され7団体が事業を実施し会員が相互連携し実施 ・喜多方蔵の会（担当　①②③④⑤⑥）　・県建築士会喜多方支部（担当　⑤） ・喜多方観光協会（担当　①⑦⑧⑨⑩）　・NPO法人まちづくり喜多方（担当　⑦） ・会津北方小田付郷町衆会（担当　⑨）　・会津喜多方商工会議所（担当　⑪） ・喜多方のれん会（担当　⑫） ◆喜多方の元気再生事業プロジェクト会議・・取組みを円滑に推進するため実施団体及び協力団体33名で構成、取組み支援、連絡調整など相互協力した実行部隊 ・事務局　NPO法人まちづくり喜多方、喜多方市役所まちづくり推進課		実施体制については、取組での実施に大きな支障は無く、概ね予定通りに機能したと考える。ただし、以下の2点については、今後改善の余地があると思われる。 1）一部の実施団体（喜多方蔵の会、喜多方観光協会、NPO法人まちづくり喜多方）に事業が集中し、相当に大きな負荷が掛かった時期があった。今後の取組にあたっては、より多くの団体に担当事業が分散されるように調整することが必要である。 2）「喜多方蔵のまちづくり協議会」は旧喜多方市のまちづくり団体を中心に構成されており、旧町村部の住民を巻き込んだ取組の実施には若干の不安があった。しかし今般、各種事業への取組を通じてこれらの住民の方々と関係の強化が図られたため、今後は「まちづくり協議会」に旧町村部の団体等を取り込み、全市的により大きな成果を得られるような実施体制作りが必要と考える。
(8)取組により得られた成果	○成果1→	市全域における各団体・市民間の交流連携を進め、地域が一体となった持続可能なまちづくりを促進するためのネットワーク化を図る。	
	H19		H20（当初予定していた目標）
	合併前の区域に限られた活動		地域間・市民間の交流連携を深め、まちづくりに取り組む広域的な組織へと発展させることにより、継続したまちづくりを可能にする。
	H20（実際に得られた成果）		
	一連の取組みを通して、旧市町村も含めた喜多方市全域に蔵が多数存在しており、市民の財産である蔵を保存していくことの重要性について市民に広くアピールを行った結果、新聞記事（50件）に取り上げられる効果もあり、広く周知できた。それに伴い、シンクタンクの組織をはじめ、旧喜多方市外の各地域からもリーダー的役割を担うメンバーが定期的に会議や打ち合わせに参加するほか、ホームページの開設やメーリングリスト（現在44名）による情報交換の実施により、広範囲の市民が参画するようになった。		

<table>
<tr><td rowspan="4">(8)取組により得られた成果</td><td colspan="2">○成果2→ 蔵の保存と利活用を進め交流人口の拡大を図ることにより、産業の振興や雇用の創出といった地域の課題解決を図る。</td></tr>
<tr><td>H19</td><td>H20（当初予定していた目標）</td></tr>
<tr><td>観光客入込数　1，745千人（539千人）　※()は9月～12月の4ヶ月間</td><td>1，833　千人　（　555千人　）　※平成21年度以降も継続した事業を展開することにより平成23年度には年間2百万人を達成する。</td></tr>
<tr><td colspan="2">H20（実際に得られた成果）</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">・H20の年間観光客入込数は1，770千人となり、当初設定していた目標には達成しなかったものの、全国的なガソリン高の影響による観光客の減少傾向の中にあって、対前年25千人（1．4%）増加となった。特に、地方の元気再生事業実施期間（9月～12月）は593千人で対前年54千人（10．0%）増加となり、目標の555千人を大きく上回った。。
・特に、取組みの拠点となった市街地では、H19（9月～12月）で370千人、H20が425千人となり14．9%と大きく増加した。
・このように、本事業の展開により、観光客が増加し地域経済の波及効果が生まれるとともに、経済や雇用情勢が低迷している中で新聞に50件近くの話題が掲載され明るい話題となった。更に地域の活性化を図っていくためには継続した取組みが必要である。
・なお、今回の取組みによって、蔵で結婚式を挙げたいと他県から申し込みがあったことや左官ワークショップと農産物直売所を開催した蔵を「蔵を活かしたまちづくりに役立ててほしい」と寄付があるなど、新たな展開に移行している。</td></tr>
<tr><td>(9)今年度の取組成果や活動を踏まえた反省点、改善点</td><td colspan="2">1）旧町村部を含めた喜多方全域には、実に多くの蔵が存在し、多くの人々はそれを誇り（アイデンティティ）として守り伝えてきていることが改めて浮き彫りになった。
2）一方で、現代生活の中で蔵の機能性や重要度は相対的に低下し、有効活用のノウハウも確立されていないために、持ち主には維持管理の経済的な負担だけが重くのしかかるという現実も明らかになった。
3）蔵を活用しようとする様々な取組の実践を通じて多くの可能性を示すことができた反面、主に蔵造りという建築構造に起因する利活用上の問題点もいくつか明らかになってきた。（例えば水廻り、室温管理、採光性など）
4）蔵の利活用に関しては、食文化、披露宴、地元食材、醸造業、地産地消などを含めた広い意味での食品関連分野が有望であるが、今後は蔵での宿泊体験等も盛り込んで、もう一段グレードを上げた「蔵での美味しい体験」など観光に結びつく（交流人口の増加）メニュー作りが必要である。
5）蔵のほとんど全ては個人所有であり、個人がそこに投資しなければどの様に優れた利活用方法も絵に描いた餅に等しい。従って、これを促進するためには技術面（建築基準法や設計・施工）や資金面（公的補助、融資制度）でのより一層の支援、改善が必要である。
6）個人や小規模企業の手に余るような大きな（豪奢な）蔵については、公的な管理や市民ファンド（住民参加型まちづくりファンド）など、いくつかの可能性について更なる検討を進める必要がある。</td></tr>
<tr><td rowspan="13">(10)平成21年度以降の活動の見込み</td><td>当初提案に予定していた平成21年度以降の展開</td><td>今年度の取組状況を踏まえた平成21年度以降の活動の見込みと活用を希望する支援制度</td></tr>
<tr><td>①常設写真展の開催,景観モデル地区指定支援</td><td>1．蔵風景のあるまちづくりプロジェクト（21年6月～12月）
・実施主体：蔵の会・小田付町衆会
・来場者の意見から高齢者や子供も気軽に訪れることが出来る時期（冬期間以外）の設定、また、制作したすばらしい写真を広く市民に公開し更なる地域の一体感を醸成するため,一般市民が撮影した写真を含めた試験的な展示を実施したい。また、蔵のある景観形成としてのまちづくりの合意形成を図るため、小田付地区において勉強会を実施し、「まちづくり景観協定締結」を目指したい。

［活用を希望する制度：上記について地方の元気再生事業の継続支援を希望（想定金額　350万円）］</td></tr>
<tr><td>②登録有形文化財に登録された蔵の保存改修、活用に対する支援</td><td rowspan="6">2．蔵のことは「喜多方に聞け！」プロジェクト（21年6月～12月）
・実施主体：蔵の会・建築士会
・次年度以降は、今年度に創設したシンクタンクに各種問い合わせに対応する窓口の設置並びに全国にデータ等を発信するツールの開発を行う。
また、それと平行して、蔵を保存・活用していくための資金確保が必要となってくることから、空き蔵を自ら収益を生み出す施設にするため、観光等の利活用に堪えうる、現代生活に適合させるような形に手を加えなくてはならない。そのため、リフォームの方策についてデザインコンペや研究会等を行い、建築基準法との整合やファイナンスも含めた問題の解決に向けた検討を行う。
なお、蔵の保存を行うにあたっては人材の育成も問題となることから、蔵とそれに関連する伝統技法等の継承のため、各種勉強会や体験講座を開催する。
以上の取り組みを通して、蔵が観光をはじめとする地域間交流の場で主要な役割を果たし、ひいては地域の建築業の活性化と伝統工法の保存へと繋がる道筋を全国に示すことを目指して推進していく。

［活用を希望する制度：上記について地方の元気再生事業の継続支援を希望（想定金額　1，500万円）］</td></tr>
<tr><td>③学習成果を取りまとめた蔵ガイドブックの作成</td></tr>
<tr><td>④蔵調査のデーターベース化と蔵情報の発信</td></tr>
<tr><td>⑤蔵保存関する各種講座の開設、蔵のデザインコンペなどの実施</td></tr>
<tr><td>⑥蔵アドバイザーの養成のための各種講座の開設</td></tr>
<tr><td>⑦蔵を活用した新たな企画立案、実施</td><td rowspan="6">3．魅力的な「喜多方観光」創出プロジェクト（21年6月～22年2月）
・実施主体：NPOまちづくり喜多方・喜多方観光協会・会津喜多方商工会議所・喜多方のれん会
・それぞれの取組みから観光面では「滞在時間を延ばすこと」が大きな課題として明らかになり、また、蔵の保存にあたっては資金面の問題があるが、蔵と観光の融合によりこれら問題の解決を図る。
来年度においては、今年度の成果を活用したより魅力的な「蔵のまち・喜多方観光」を創出し、観光客等に実際の体験・評価を頂くことで観光コースの改良等を行い、22年度以降の本格始動に向けた準備を行う。
①農泊や空き蔵を利用した食文化等の体験・新観光ルートを有機的に組み合わせたツアーを企画し、観光客（県外？モニター）に実際に体験して頂き、アンケート調査を行う。22年度以降に着地型観光を定着させるため、アンケート結果をもとに企画内容の改良を行う。
②観光コンシェルジュの組織化を行い、農泊体験・新観光ルート等を組み合わせた着地型観光での案内役として活躍の場を確保する。
③地域内の様々な祭りやイベント、体験型観光の案内、蔵にまつわる各種の勉強会・講習会までを網羅した「喜多方の楽しみ方百科」的な情報発信ツールの開発を行う。
④これまでになかった住民との交流を楽しむ滞在型観光を促進する「まちなみ博」を開催し、観光振興を進めることで、民間が担う組織づくりとしてのコンソーシャム設立と収益事業につなげる。
⑤広域な範囲での観光ルートに適応させるため、地域間を結ぶ2次交通（レトロバス）の試験運行を行う。
⑥微生物の知識習得を踏まえ、飯豊山からの微生物採取、分析、利活用に関する勉強会を行いながら、喜多方発酵研究所の立ち上げによる、新たな商品開発を目指し、地場産業と観光振興につなげる。

［活用を希望する制度：上記について地方の元気再生事業の継続支援を希望（想定金額　1，000万円）］</td></tr>
<tr><td>⑧農泊体験メニュー確立と外国からの誘客の促進</td></tr>
<tr><td>⑨新観光ルートを巡るレトロバスの試験運行</td></tr>
<tr><td>⑩新観光ルートの試験的案内の実施</td></tr>
<tr><td>⑪発酵醸造の勉強会などを踏まえた微生物探索の実施</td></tr>
<tr><td>⑫食の試作品開発と試験的活用</td></tr>
</table>

日本一の蔵再生によるまちおこし（福島県喜び多き地方都市［喜多方市］）ー喜多方蔵のまちづくり協議会ー

平成20年度 地方の元気再生
事業実施調書　【参考資料】

◆取組の概要◆

市民全体が意識を共有できる喜多方の「蔵」をキーワードにした12のプロジェクトを、市町村合併後の地域が一体となって取り組むことにより、市民意識の一体感の醸成を図り、蔵を活用した中心市街地及び農村部の活性化、都市と農村との交流推進、喜多方ブランドの展開による農林業及び地場産業などの地域活性化を効果的に実践する。

◆主な実施取組の内容◆

保存と再生のための「蔵手本」の作成と後継者養成

（県建築士会喜多方支部、
喜多方蔵の会）

［結果］

喜多方の蔵の保存と再生を図るため、耐震やメンテナンス手法等も含め、特徴と伝統を活かした蔵保存と再生のための活用指針「蔵手本」を500部作成し市内関係者に配布。

また、蔵の建築や補修に欠かせない伝統的な工法や技能の継承を確実にするため、学生や一般市民を対象としたワークショップ（講習会）を3回開催。

蔵の調査と蔵手本

ワークショップ

蔵を活用した観光新ルートの開発

（喜多方観光協会）

［結果］

近代化産業遺産「三津谷煉瓦窯」を核にした新観光ルートを開発するためモニターツアーを4回実施。煉瓦師の人生をストーリー化した煉瓦蔵周遊コースを開発。

また、11月1日から1ヶ月間「おたづき蔵通り」で最も蔵の集積度が高い約280m区間において、車道の幅員を片側3mに狭め、車歩道境界にフラワーポットと瓦燈を設置する社会実験を実施し、蔵のまちにふさわしい道路のあり方に関するアンケート調査を行った。

新観光ルート開発

おだづき蔵通り社会実験

蔵を活用した社会実験

（NPO法人まちづくり喜多方）

［結果］市内に多数存在する蔵（空き蔵を含む）の活用促進を図るため、各種の社会実験を行った。

- 蔵での結婚披露宴（60名）
- パティシェによる喜多方の食材を使ったスイーツレストラン（40名）
- 未公開蔵の公開と生活体験（466名）
- 安全安心地産地消喜多方ブランドとなる農産物の販売及びその食材による調理の提供（932名）
- 子育て支援や障害福祉などのファミリーサポート（蔵テラス）（1,600名）
- 高齢者や主婦等の民間ボランティアによる蔵活用（店舗）の成功事例づくり（1,500名）
- 昭和と今を蔵べっぺ展（5,900名）

各社会実験を通し、蔵の特性や利点を活かした様々な利活用の可能性を示すことができた。

特に、蔵は地産地消をキーワードとする地域の特産食材や食文化、発酵や醸造などの地場産業も絡めた「食」との相性が良いことが分かった。

蔵での結婚披露宴

農産物直売所「ろくさい」

スイーツレストラン

昭和と今を蔵べっぺ展

◆取組実施による成果◆

・蔵の活用による市民一体となったまちづくり

蔵の写真展、調査、シンポジウム等の市内全域、市民全体としての取組み
更に、各種マスコミ、回覧等による「蔵の活用によるまちづくり」の周知

・観光客入込数

年間(1月～12月)	177.0万人	対前年2.5万人増	1.4%増
事業実施期間(9～12月)	59.3万人	対前年5.4万人増	10.0%増
取組拠点周辺(9～12月)	42.5万人	対前年5.5万人増	14.9%増

市民一体感の盛り上がり
意識の共有化

観光客の増加

発展的な取組みを展開

◆今後の展開◆

蔵によるまちづくりを自立させ持続的なものとするため、これまでの取組みにより生まれた新たな課題に対応しつつ、取組みのグレードアップを図る。
（事業収益性の確保、人材の育成、まちづくりの合意形成と組織化）

1. 蔵風景のあるまちづくりプロジェクト　（21年6月～12月）
2. 蔵のことは「喜多方に聞け！」プロジェクト（21年6月～12月）
3. 魅力的な「喜多方観光」創出プロジェクト　（21年6月～22年2月）

豊かで元気な農山村と
活力ある生活・観光都市